

研究室紹介

写真資料調査室

平城宮跡発掘調査部に属する写真資料調査室は、2001年4月の法人化と同時に新設された、写真業務全般をおこなう調査室です。もっとも業務量の多い平城宮跡発掘調査部に身をおいていますが、仕事の内容は非常に多岐にわたり研究所に関する視覚的な部分全般を受け持っています。

法人化以前、研究所での写真撮影や処理は、定員職員を3名確保しているにも関わらず独立した部署がなく、機構替えのたびに写真関係室の設置を要求し続けて参りました。これもひとえに文化財調査の中で写真の重要性を訴え続けてきた先人たちのおかげです。

さて、我が調査室の内容です。メンバーは飛鳥藤原宮跡に併任として配属されている1名を含んで定員職員3名。室長は平城宮跡発掘調査部長が併任しています。常勤職員以外では暗室処理をはじめ写真処理全般のサポートをいただいている整理作業員が平城・飛鳥藤原両調査部に各1名の2名。データベースをはじめとする写真の利用を目的として、撮影した写真のPro-PhotoCD入力を担当するために文化財情報研究室から来ていただいている派遣職員1名および、サポートメンバーとして写真業務全般を業務委託している1名の合計7名体制で業務をこなしています。

日々のお仕事はといいますと、先述のように最も重要で多量の業務が発掘調査での記録写真撮影です。文化財発掘調査においては後世の検証が困難であり、遺構の性格を把握するための客観的資料である発掘調査記録写真は、それ自体が「文化財」としての役割を持っています。調査で出土した資料や発掘調査以外では文化財建造物・古文書などの史料をそれぞれ適切な方法で撮影し、カラー・モノクローム写真処理をおこなっています。これらの写真資料フィルムは利用頻度が高く、使用することによる媒体自体の劣化が懸念されるため順次デジタル化し、デジタルデータを利用することによりフィルムの安定保管をおこなっています。

そのほかの業務としては、地方自治体への撮影指導や奈文研発掘調査技術者研修の写真研修などによる文化財写真の意義・必要性・重要性などを広める役

割も担っています。最近では、朱雀像が確認されたことで有名なキトラ古墳の画像調査や、ドイツでおこなわれた日本考古学展の展示図録用写真を全国的に撮影して回るなど調査室総力を挙げた仕事も増加してきています。

また、我が調査室では撮影技術の向上とともに写真資料の将来性について常に考えています。全国的にデジタル時代の波に流されて「安・軽・薄」にデジタル技術を使用する動きが広がっています。デジタルデータは媒体・データ形式の恒常性が低く、内容の信頼性を確立することも困難なため、決して安易にデジタル化を進めるべきではありません。文化財写真資料のために最も良いデジタル技術の利用方法を常に考えて日々業務を遂行しています。

(平城宮跡発掘調査部 中村 一郎)



恒温恒湿に空調されたフィルム保管室



発掘調査では高所からの撮影も要求される